

子育てと擬制的親子関係

— 沖永良部島の伝統的社會制度 —

Child Rearing and Constructive Parent-Child Relationship:
Traditional Social System in Okinoerabu island

高橋孝代

TAKAHASHI, Takayo

キーワード：擬制的親子関係、仮親、養い親、名付け親、守親

1. はじめに

近年、日本社会における子育てを取り巻く環境は大きく変化しつつある。少子高齢化に伴い、国をあげて出生率の引き上げが取り組まれ、そのための環境がにわかに関心を集めるようになった。子育ての困難さが出生率の妨げになっていることから、子ども手当の給付など子育てを助ける様々な政策も打ち出された。

そして、核家族化や女性の社会進出に伴い、子どもを預かる保育施設が重要性を増し、施設の充実が国や行政の優先重要課題の一つとされ、待機児童ゼロが目標とされるようになった。また女性の社会進出に伴い父親の育児参加がより促され、育児を手伝う男性はポジティブな意味合いで「イクメン」と呼ばれるようになった。

その一方では、児童虐待も社会問題となり、死にいたるケースも後を絶たない。厚生労働省の統計によると、2014年度の全国の児童相談所が、児童虐待相談として対応した件数は8万8,931件を数え、10年前の2004年度の3万3,408件から2.7倍となり過去最多となった。

このような現代日本社会の子どもとその環境の現状に対し、新たな施策を次々と打ち出すのではなく、子どもを育てるといふことはどういうことなのか、原点に立ち戻って、日本で伝統的に行われてきた子育て文化の一つである「擬制的親子関係」を取り上げ、子育てのあり方を再考する手がかりを提示したい。

柳田國男も「日本人のごとく、人をやたらにオヤにする慣習を持っていた民族も稀である」(柳田1990:332)と記していたほど、かつて日本には、生みの親以外に、仮親をもつ擬制的親子関係が多く存在した。この慣習は全国的であったが、現在では能登地方や伊豆諸島の利島

など限られた地域に残存するに留まる。奄美諸島に位置する沖永良部島でも擬制的親子関係が結ばれる慣習が複数存在していたが、今ではその存在自体を知る人も年々少なくなっている。この慣習を経験した人や知りうる世代に直接に聞き取り可能なうちに、実態を調査し報告したい。

奄美沖繩研究において、従来、歴史や信仰、儀礼や祭りなどの研究は盛んであったが、擬制的親子関係や仮親に関する研究蓄積は多くはなかった。植松明石の「沖繩の擬制的親子関係」(1978)に沖繩の擬制的親子関係の概要が報告されているが、奄美諸島に関する記述はない。知見では、沖永良部島における擬制的親子関係に焦点をあてた研究は承知しない。本稿では、沖永良部島で行われていた擬制的親子関係、すなわち、「養い親」^{ヤシネーウヤ}、「名付け親」^{ナーチキウヤ}、「守親」^{モリウヤ}に焦点を当て、子どもを取り巻く社会関係が、どのように形成され、どのような機能をもっていたのか、子育て環境と家族及び社会との関係を考察する。

この「擬制的親子関係」は、実の親とは別に、他人との間に親と子の関係を結ぶしくみである。以下ではこの関係における当事者をオヤ、コと表記し、生物学上の親子と区別することとする。

2. 沖永良部島の概況

沖永良部島は、沖繩本島と日本本土の間に位置し、鹿児島県に属する奄美諸島の島である。和泊、知名の二町からなる人口12,779人(2017年5月1日現在)、面積約42キロ平方kmの小さな島である。島内には親族を中心に構成される42の集落があり、それぞれが共同体として機能している。隆起珊瑚礁からなる平坦な地形は耕地に恵まれ、亜熱帯性気候を活かした花卉、根菜類、さとうきびなどの栽培が盛んな農業中心の島である。

本稿は、1998年以降継続的に行っている現地調査、および2017年2月、7月に行ったフォーマル、インフォーマルインタビュー調査、そして文献史料に基づいている。現在、擬制的親子関係を結ぶ慣行は、「過去の遺物」となりつつあり、この風習を知る人も少なく情報を得るのも容易ではなかった。そのため、以前、この慣行を題材に「子ども方言劇¹⁾」を行ったことのある畦布集落を中心に調査することにした。2017年の2月及び7月の調査で、畦布在住の擬制的親子関係を結んだことのある人は25組おり、最も高齢者は大正7年生まれ、最年少は昭和37年生まれであった。これらはコにあたる人であり、オヤの役を担ったことのある人は、年齢的に既に他界されており、直に話を聞くことはできなかった。しかし、オヤを担った人の家族や知人から貴重な話を聞くことができた。

調査の中心となる畦布集落は和泊町に属し、農畜産業の盛んな集落である。最も古い集落の一つとされ、集落に伝わる民俗芸能など伝統的な文化の傳承に力を入れている。伝統文化を大切に集落の気風と擬制的親子関係が近年まで残っていたことは無関係ではないと考えられる。

3. 養い親・クワーシミュン

沖永良部島の擬制的親子関係は、どのような慣行であったのだろうか。初めに、養い親を頼む慣習から報告する。島ではオヤを頼み、擬制的親子関係を結ぶことを「クワー・シミュン（子にさせる）」と言う。

まず、どのような子どもがオヤを必要とみなされるのか、コを中心にみしてみる。インタビューデータからコにさせた（クワーシミタ）理由を分類すると、「体が弱い子ども」、「よく泣く子ども」、「母と相性が悪い子ども」「落ち着きのない子ども」の大きく四つのパターンに分けられた。まず最も一般的なコにさせる理由が「体が弱い」ことであった。体の弱い子どもは「クワー」させると健康に育つと考えられ、まず民間の霊媒師・シャーマンである「ユタ」に相談する。ユタに相性の良い人を推薦してもらい、オヤをお願いするという順序である。

次に、夜泣き、夕泣きなど普通以上に「泣く子ども」も、悪霊など何かしらに祟られていると考えられ、「クワー」させるという。例えば、昭和26年生まれ満66歳のMさんは、とにかくよく泣く子どもで、家の周りを泣きながらぐるぐると周り、なかなか泣き止まないの、同居の父方の叔母がユタに相談し、遠縁にあたる男性にオヤをお願いしたという。

また、昭和37年生まれのOさんは、自宅近くの三叉路

場所に来ると、大声で泣きながら母親を呼ぶことがしばしばあったという。そのためTさんの母親は近所に住む健康で立場のある女性にオヤになってもらった。今でもその三叉路には魔除けの「石敢當」が設置されている。

特に、夕泣きのひどい子どもを島では「ヨーネナチグワ」と呼ぶ。お腹が空いているわけでも、おむつが不快なわけでもないのに、夕方、母親が夕食の支度をする時間帯に泣き続ける子どもは、先祖が何かしらブリ（失礼なこと、悪いこと）をしたため、ムンゾイ（祟り）が子どもにかかっていると考えられ、そのような場合はユタに相談に行くことが慣例であったという。すると、ユタが祟りから解放させるためにクワーさせた方がよいと助言し、オヤとなる人の生まれた干支や住居の方角からオヤを推薦する。

また、「母親との相性が悪い子ども」もクワーさせる。そのような子どもは母親と向き合うのは授乳の時だけで、それ以外の時は、顔を合わせようとせず、背中を向けてばかりなのだという。母親に甘えることがなく、抱っこもされたがらない。そのような子どもも、ユタに診てもらい、相性のいい人にオヤを頼むようである。

さらに、「落ち着きのない子ども」も、ムンゾイ（祟り）かあるいは心的問題があるとされ、ふさわしいオヤを探し「コにさせる」という。何らかの理由で、健康に育っていないとみなされる子どもが、オヤを頼むのである。

次に、どのような人がオヤになるのか、オヤの側に視点を移す。それはその子どものオヤを頼む理由にもよるが、一般的にはユタに相談し、子どもの生まれた干支などからオヤを推薦してもらう。

オヤは男性でも女性でもよいが、男の子には男性のオヤが好まれたようである。特に大工と鍛冶屋は、男性のオヤとして選好される職能であった。例えば、昭和5年生まれで満87歳の男性Hさんは、体が非常に弱く、心配した母親が同じ畦布集落の大工のコにさせたという。血縁関係はなく、正月二日の大工の祝い（セークヌエー）の日には、毎年挨拶に行き、それ以外は、家で収穫した農作物をおすそ分けに持って行ったりする付き合いであったと語る。

大工と鍛冶屋がオヤとして好まれるのは、沖永良部島における大工神と鍛冶屋神に対する信仰に由来している。島では、「セークガミ（大工神）より上はない」といわれ大工神は最も霊位の高い神とされ「祭りの一番」といわれる一月二日に「大工の祝い」が行われる。大工神を祀る家には、霊媒であるユタでも「大工神に押さえつけられ仕事ができない」といい、その家に入らないのだという。

また、鍛冶屋は大工以上に恐れられており、「鍛冶屋の

子と喧嘩をしてはいけない」、「鍛冶屋の跡地を屋敷にしてはいけない」といわれている。高位の神を祀っている人物がオヤになることで、子どもが守られると考えたのであろう。

また、今回の調査ではユタにオヤをお願いした例はなかったが、ユタ自身もオヤとして好まれたようである。ユタは巫病過程の中で修行的彷徨を経て、神から選定されたものとしてユタになるが、彷徨は「チジ(頂)」を同定する過程である。チジとはユタの霊力の根源となる神霊で、いわば守護神である。ユタは自己の守護神的なチジの性格によって、さまざまな関与知識をもつ。生霊死霊の口寄せ、時や方位の吉凶占い、人の運命の占い預言もすれば、結婚式の日取り、家庭の一年の運勢、病氣治療などユタの専門とする領域もそれぞれ異なっている。ユタ神を祀るユタがオヤになれば、ユタ神の霊力でコが守られ健康に育つと考えたと推察される。

さらに、月を祀る人もオヤとして好まれたようである。沖永良部島出身の郷土史家、甲東哲は、『島のこぼれ』でオヤを頼む風習「クワーシミル」についての説明で「赤ん坊が病弱な際、ユタに占わせると『父と母の性が合わないせいだから、二十三夜の神を祭っている人の子にしてもらいなさい』などと告げることがある。親は該当する人を探して「どうかこの子をあなたの子にしてください」と頼む。相手が承諾すると月の二十九日には米や酒肴を持参し、赤ん坊を連れて行ってその家に一泊する。これを三回すなわち三か月続けるのが例であった。これをチキタティユン(月をたてる)といった。」(甲1987:74)と記している。沖永良部島では月は「子ども、健康、女性」に関係のある自然物であり民間信仰の対象で、二十三夜は旧暦の正月五月九月に盛んに行われていた。二十三夜の神を祀る信仰は、奄美沖繩に限らず本土でもみられた。多くは女性の講で、二十三夜待ちは「三夜待ち」「産夜」と呼ばれ、三夜待ち行事の場所には「三夜塔」と刻まれた石塔が建てられることもあった。「月読神社」には、『記紀』に基づく日本神話で月の神とされる「ツクヨミ」が祀られているが、子どもに恵まれぬ夫婦がお参りすると子宝に恵まれるといわれる。このように月は子ども、女性、育児など子育てに関係する。月の神を祀る人をオヤにふさわしいとみなすのは、不思議ではない。

また、ユタ、大工、鍛冶屋、月を祀る人といった、霊力を背景にしたオヤの選定とは関係なくオヤをお願いする場合もある。ユタを介さず実親がオヤをお願いする場合の多くが、実親が親密な関係になりたいと望む相手である。女性でも男性でも、親戚の人でもそうでなくともかまわないが、多くの場合、血縁関係はなく「他人」である。親族が基本的な社会関係の単位である沖永良部島では、「他人」と親しい関係でいるには、それなりの理

由が必要になる。周囲に対しても親密な関係をもつ「口実」として養い親になる場合もある。その相手は、面倒見がよく、自分の子どものように大切にしてくれる、人格的にも優れた人が多いという。

次に、擬制的親子関係の儀礼的な側面に目を向ける。正式にオヤをお願いする時は、お膳にごちそうを作ってオヤの家に持っていき依頼する。それ以降子どもが数え年の13歳になるまで、正月の挨拶、オヤの家でのお祝い、法事などには招待されてごちそうになる。儀礼的な行事の時に「コ」として参加するのである。そして、数え年の13歳になった正月には、オヤの家に挨拶に行き、「オヤコ関係はここまで」、という区切りとして、オヤの家においてあるコ専用の茶碗や箸、湯飲みを持って帰るのだという。その際、オヤが着物などを持たせることもあるという。13歳とは、かつては成人とみなされた節目の年齢で、無事に大人になったということで、オヤの役目も終える。だが、その後も付き合いが続く場合も多い。例えば、Mさんは数えの13歳になるまで毎年正月にオヤの家に挨拶にいき、最後の挨拶にはその家で使ったご飯茶碗と箸をもらい受けた。その後も交際は続き、オヤの男性が亡くなった時には枕元に座らせてもらい、実の親子扱いでお別れさせてもらった、と語る。

クワーシミュンの養い親慣行は、生まれた子どもが、何かしらの理由で健やかに育っていないと判断した場合、その対処法の一つであり、呪術的力があると考えられる人物のコにしてもらい、その呪力の助けもかり、成長を促そうという実親の願いから発した風習といえる。

4. ナーチキウヤ 名付け親

次にナーチキウヤの慣行について報告する。沖永良部島に限らず奄美沖繩の各地では、新生児が祖先の名前を継承する慣習がみられる。この慣習は祖名継承と呼ばれるが、沖永良部島の祖名継承に関しては、嶋島直、吉田竹也による報告がある。嶋島、吉田は知名町の集落を調査対象とした研究である。以下、これらの先行研究を参考に説明する。子どもが生まれたら、シマナー(集落内名)あるいはワラビナー(童名)といわれる通称と、戸籍名であるガッコウナー(学校名)と呼ばれる名前をつける。

祖先のガッコウナーをシマナーとして継承したり、ガッコウナーの一字やシマナーの音を継承者のガッコウナーの一部として継承する場合もあり、これらがナーチキとよばれる習慣である。それには文字をそのまま継承する場合と、読みは同じでも文字を変える場合とがある。名の被継承者はナーチキウヤ(名付け親)、継承者はナーチキグワ(名付け子)と呼ばれている。名を提供する人は、

生者であるか死者であるかは問われないが、故人であれば「誰それからのナーチキ」とはいうが、ナーチキウヤとは呼ばれない。

名づけの理想の型としては、長男が生まれれば、父の父、長女は父の母、次男は母の父、次女は母の母から、三男以下の男子は、父母の兄弟、あるいは曾祖父、三女以下の女子は父母の姉妹あるいは曾祖母から継承するというものである。だが、実際は祖名を継承するのは長男、長女だけで、次男、次女以下は、オジ、オバの名をもらう場合も多い。いずれにしても、ナーチキウヤとなりうるのは、祖父母、あるいはオジ、オバ、曾祖父母などの血縁者であり、親族関係にある人物である。

シマナーの数には限りがある。またそのほとんどは数詞や普通名詞に由来し、二音節からなる。それは、男性ならば、イチ、ニチ、サブ、ユニ、グラ、ムチャ、ナビ、ヤマ、クマ、トゥドゥ、女性ならば、チュマ、タル、ミヤ、ヨシ、イシャ、ムチャ、ナビ、ヤマ、クニ、トゥユと、島の人は数を数えるようにシマナーを列挙する。それほど身近なものである。ところで、長男でもサブ、三男でもイチを命名するなど、名前と出生順には直接の関係はない。またハル、ナツ、アキ、フユなど季節の名前も多いが、出生した季節を示すとは限らない。

また、一度ナーチキをしたが、病弱で健康に育たない場合、大工や鍛冶屋のような高位の神を祀っている人にオヤになってもらい、それまでのシマナーを捨て、オヤの名前を付けなおすという。

伝統的には、名前の提供者は自分の名前が継承されることを喜び、継承者をたいへん可愛がるものであるという。彼らは、自分の何人かの孫、あるいはひ孫、甥、姪のなかでもナーチキグワを特別に扱うものである。

また、名の提供者は、継承者に対して、ナーチキダマスイと呼ばれる贈与を行う慣習がある。これは、自分の名前を付けてくれたことへの御礼として贈るものであるという。自己の名を継承するものであれば、共住するものであっても、他家に住むものであっても、命名の直後、そして進学時などの成長の節目に、一度ならず贈られるものである。一般的品目は、雌鶏一羽、金銭、着物である。財力があるものであれば、田畑や牛など経済的価値が高いものを贈った。古くは、米、粟、麦などが贈られたという。この関係は、親族という緊密な関係の中において、さらにオヤ-コ関係を強固にしている。だが、近年は祖名を継承して名前を付ける慣習は減少している。

5. ^{モリウヤ}守親

次に、守親慣行をみよ。農業を主産業とする沖永良部島では、農家の嫁は重要な働き手であり、出産後も

なるべく早くに仕事に復帰しなくてはならない。そのため、母親は授乳の時以外は、子守役の近隣の少女が子どもの面倒を見る慣習があった。

同島では、手回しの良い家庭では、乳児のへその緒の枯れ落ちる頃より「子守」をする少女を付けたという。子守にあたるのは、7、8歳から14、5歳くらいまでの少女であり、家に姉がいなければ他家の少女を頼む。給金はなく、子守をする家で三度の食事をし、夏冬の着物をもらうのが、子守の対価であった。少女たちは近所の子守に喜んで出かけ、日中は子どもをおんぶして他の守姉たちと遊び、夜は実家にもどる。明治期までは、義務教育でもあまり厳しくなかったのも、労働者階級の少女は、学校に行かず住み込みで子守奉公をしたという。

子守の少女たちは集まっていっしょに遊ぶことが多く、乳児を背負ったまま、かくれんぼや鬼ごっこをして遊び、赤ちゃんが泣くと子守唄を歌って寝かしつけたという。

このような子守文化の中で生まれたとされる「沖永良部島子守唄」は守親であった少女の心情が読み込まれている。沖永良部島固有のこの子守歌の歌詞は8886の琉歌調であり、曲調は典型的な琉球音階の子守唄である。以下、「沖永良部民謡傑作集（改訂版）」所収の同歌の二番までの歌詞を記す。

一、子守い者ぬ哀れ 夜昼ぬ物憂 物憂忘りらば
御祝しゃぶら

邦訳（子守するものの身は哀れ 夜昼となく物思いに
ふける この悲しさを忘れることができるなら
お祝いしましょう）

二、うらがいがちなちゃんてい うらうやぬ守ゆんにや
わどうわなとてい うらも守やる

（お前がいくら泣いても お前の親はお前のお守りはしないよ 私だからこそこうして つらいお守りもするんだよ）

子守は、子どもが大体独り歩きをできるまでから、三歳くらいまでであったが、子守期間を終えても、子守をした子どもを頻りに訪ねて交際を続けるので、生涯にわたり仲のよい親密な関係が続くのだという。

畦布集落の85歳のMさんは、オイチュヤ（豪農の家）の子どもであった時、国頭集落からTさんが子守奉公として同居していた。子守の期間はとくに終わり、Tさんは今では93歳になるが、互いに島に住んでいたため、しばしば電話をかけあい、安否を気遣うような親しい間柄が続いたという。

この風習も沖永良部島に限らず、奄美沖繩で広く見られたが、今ではすっかり廃れ、宮古諸島の多良間島でかろうじて近年まで慣行されていたに留まる。

6. 沖永良部島の擬制的親子関係の特徴と機能

以上、沖永良部島における三種類の擬制的親子関係を紹介した。これらには、一般的にどのような特徴があるのだろうか。

擬制的親子関係は、全国的に数多く存在し名称も様々であるが、関係を結ぶ時期を指標とし、分類すると、①こどもの誕生前～幼年期に結ばれるもの、②成年期以後に結ばれるものに二分別できる。

これら仮親の例を簡潔にあげると、まず①については誕生前から幼年期の仮親には妊娠中に岩田帯を送る「帯親」、出産に立ち会う「取り上げ親（産婆）」赤ちゃんを最初に抱く「抱き親」、生後数日間母乳を飲ませる「乳付け親」、子どもに名前を付ける「名付け親」、両親の厄年に生まれた子どもが丈夫に育つことを願って、儀式的に道に捨てた子どもを拾い上げる「拾い親」、体の弱い子や夜泣きがひどい子どものオヤになる「養い親」、4、5歳になるまで子守をする「守親」などがある。

一般に、幼年期の仮親慣行は、古くから「7歳までは神のうち」といわれるように、この世に誕生した子どもの「魂」が定着することを願って、多くの儀礼が行われ、そのたびに「仮親」との親子関係が結ばれていたようであり、子どもの健やかな成長を願う呪術的意味合いが強い。

次に、②の成年期以降に結ばれる擬制的親子関係には、成人の際に男性に禪を贈る「禪親」、元服に立ち会う元服親や「烏帽子親」、女性に腰巻や鉄漿付け道具（成人の証としてお歯黒を塗る際の道具）を贈る「腰親」や「鉄漿親」、婚礼の際に仲人になる「仲人親」などがある。能登地方には男性は大体一人前になるころにヨボシオヤ、女性は結婚後カネツケオヤをもつ慣行がある。これらは、「烏帽子親」、「鉄漿付け親」に由来するという。また伊豆諸島の青ヶ島では昭和40年代半ばまで、女性の初潮の時期に養い親との疑似親子関係を結び、オヤはお産にも付き添うのが慣例だったという。

本稿で報告した沖永良部島の擬制的親子関係は、全て上記の①に分類され、乳幼児期から幼年期に結ばれる風習である。成人の際に行われる仮親慣行は聞き取り調査でも耳にすることはなく、文献にも見出せなかった。野間吉夫が1937（昭和12）年に沖永良部島に民俗調査に訪れた際の記録にも、幼年期の仮親慣行のみで成年期の例は報告されていない（野間1942：46-47）。沖縄についても同様のようで、植松明石は「……特に成年式、結婚式などに際してむすばれる社会的、経済的特徴をもつとされるオヤ-コ関係の事例が殆どなく、あっても特に注目するような点がみられなかったことによる」（植松1978：10）と述べている。

沖永良部島の三種類の仮親慣行を他の地域と比べてみる。

「養い親」は、日本国内でも各地にみられるが、奄美沖縄では最も一般的な仮親慣行といえる。「体が弱い」、「夜泣きがひどい」など身体的危機に対し、新たに別にオヤをもつことによって「生まれ変わる」あるいは「再生」という意味がある。沖永良部島の場合も、その意味合いをもつが、オヤとしてユタ神、大工神、鍛冶屋神、そして月神を祀っている職能が好まれるという、島の民間信仰が反映していることに特徴がある。

「名付け親」はどうであろうか。命名は新たにこの世に生まれた子どもに社会的価値を付与し、現世と繋がる架け橋となる。日本本土の名付け親は、誰が名付けのオヤになるかに重点がおかれ、選好されるのは神官、巫女、僧侶など神仏に仕える人物で、その霊力によって子どもを守護しようとする名付けの行為である。他方、沖永良部島では、「名」自体が重要で、それが特定の祖先の「名」であるという点が特徴である。それは、「祖名継承」という祖先崇拜を背景にした慣習であり、コにとっては祖先、及び自己の属する親族集団の系統を明確にし、血縁関係紐帯を強固にする。祖名継承は奄美沖縄の他の地域にもみられるが、農業を主産業とする沖永良部島では、田畑や家督の相続は男子長子相続が優勢であったため、相続の有無あるいは大小などを明確にし、無用の争いを避ける働きもあったのではないだろうか。そのため、同島では、特に受け入れられた慣行だったのではないだろうか。

沖永良部島の「守親」は、伊豆諸島の新島、宮古諸島の多良間島の守親と類似の慣行である。新島出身者によれば、同島では貧富の差によらず手のあいている若い女の子が、子育ての練習もかねて「もんも」と呼ばれる子守役になる。モリオヤの家族は、コにとって「第二の家族」となり、生涯親戚付き合いが続くという。多良間島でもモリに見込まれた少女の家族とコの家族は家族ぐるみのつきあいとなり、モリは生涯コの世話をするという。それらに比べると、沖永良部島ではその関係性に微妙な差異があるように感じる。より貧しい家庭の少女が多くモリに従事していたと考えられ、モリオヤとコの関係は、親子、あるいは兄弟姉妹の關係に、雇い主の子弟と雇われた者というニュアンスが含まれていると思われる。それは、貧富の差が広がった近世末から近代に多く見られた慣行で、時代によって違いがあるだろうが、比較研究のためにはさらなる調査が必要である。

さらに沖永良部島の三種類の擬制的親子関係は、「子育て」という点でどのような意味があるのか考察してみる。本稿で報告した養い親、名付け親、守親はそれぞれ、オヤは同住か集落内に住む血縁者から近隣の少女、集落外の非血縁者の養い親まで、擬制的親子関係を結びつつ社

会空間を広げ、コを中心に人と人との繋がりで人間関係を拡大する慣行である。年齢をみても、コの年齢に近い守親から実親と同世代の養い親、祖父母あるいは曾祖父母がなりうる名付け親まで、様々な年齢の人と関係を結び、社会的基盤を固め、子どもの成長を社会的に支援している。それは、血縁集団、集落を単位とする集団に加えて第三の社会集団の礎となる。

また、擬制的親子関係は、経済的にも子育てを支援する。養い親の家の祝いごとでは必ず招待され、ごちそうになる。子どもの成長期に栄養ある食事の機会が増えることは非常に大切である。守親も、重要な働き手である一家の母親が、子守をする時間を省き、家事農作業へ従事する時間を産み出す。さらにナーチキウヤはナーチキした子どもの成長の節目には、ナーチキダマスイという贈与があり、経済的にも子どもの家族を助ける。三種類のオヤたちは、空間的に非常に近い人物から、集落外まで、関係は広がりながら、精神的に経済的に子どもの成長を助けてきたといえる。擬制的親子関係は、呪術的意味合いからの精神的効果、さらには経済的効果もある関係性といえる。

7. おわりに

沖永良部島の擬制的親子関係は、実親以外と社会関係を結び、子どもの成長を助ける文化的慣行である。擬制的親子関係におけるオヤ達は、地域の中で、経済的にも精神的にもコの強い後ろ盾となり、子どもを育てるということに、様々なかたちで支援した制度といえる。

親と子どもが一对一で向かいあうのではなく、子どもはクモの糸のように縦横斜めに社会関係を結び、子どもの社会的位置を確保しつつ成長を促す。現代は、特に都市部では、子育て空間が狭く、親と子どもが社会から取り残されたような孤独感を感じることも、子育ての困難さ一つであった。だが、かつて日本各地でみられた擬制的親子関係は、多くの人とその社会関係の中で、子育てに参加することで、オヤの負担も軽減し、コは、実親以外の人々にも親同様の愛情を注がれ、精神的な支えにもなったであろう。

子育て空間を拡大し、コの社会関係を強固にする擬制的親子関係には、意図していたかは別として、当時の人々の自然な子育ての知恵がみとれる。

〈注〉

- 1) 沖永良部島の和泊町では文化協会、教育委員会主催で1994年より「シمامニ大会」という方言で劇やスピーチを行う発表会を開催し始めた。畦布集落では中村スエが脚本を作り子ども達の劇を指導し毎年発表していた。2004

年には擬制的親子関係を題材に「子しみてい」という方言劇を発表した。

参考文献

- 植松明石1978「沖縄の擬制的親子関係」『日本民俗学第114号』日本民俗学会、pp.10-21
- 大藤ゆき1978「幼少年期の仮親」『日本民俗学第114号』日本民俗学会、pp.1-9
- 柏常秋1954『沖永良部島民俗誌』凌済文庫刊行会
- 川野玲子1992「擬制的親子関係について」『金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書』金沢大学、pp.89-97
- 甲東哲1987『島のことば』三笠出版
- 先田光演1989『沖永良部島のユタ』海風社
- 先田光演1999『奄美の歴史とシマの民俗』まろうど社
- 高橋孝代2006『境界性の人類学—重層する沖永良部島民のアイデンティティ—』弘文堂
- 蛸島直1984「奄美一村落の病気観—沖永良部島S集落の場合—」『民族学研究』49(2)、pp.103-130、日本民族学会
- 蛸島直1988「沖永良部島の祖名継承」『日本民俗学の展開』北見俊夫編、pp.119-145、雄山閣
- 蛸島直1991「沖永良部島屋敷形成過程」『家と屋敷地』社会民俗研究第2号、pp.126-142、社会民俗研究会
- 中村スエ2016「シمامニ劇 子しみてい」自筆脚本
- 根ヶ山光一2012『アロマザリングの島の子どもたち：多良間島子別れフィールドノート』新曜社
- 野間吉夫1942『シマの生活誌：沖永良部島探訪記』三元社
- 八木透編2001『日本の通過儀礼』思文閣出版
- 柳田國男1990「親方子方」『柳田國男全集 12』筑摩書房 pp.499-526
- 吉田竹也1988「今日の祖名継承—沖永良部島一村落に於ける「ナーチキ」をめぐる」『民族学研究 53-2』日本民族学会、pp.214-228
- 和泊町編1985『和泊町誌—民俗編—』和泊町教育委員会

歌詞

「沖永良部民謡傑作集 改訂版」セントラル楽器